

# げんでん 福井 ふれあい

GENDEN FUREAI FUKUI

2000 第6号 SPRING

- ・「福井の文化を語る」座談会
- ・敦賀市立博物館訪問
- ・“ふるさとのまつり”  
写真コンテスト入賞作品展
- ・特集「福井と恐竜」



# “福井の文化を語る”



土肥 英二郎氏

新世紀、民間、

行政一九で文化環境を

司会 皆様おめでとございませう。今回の受賞のご感想は。  
 土肥 げんでんふれあい福井財団と文化活動をやっている私達とのふれあいの場として身近な「ふるさと文化賞」を設けられたことに親しみを感ずります。  
 田中 西暦2千年という輝かしい節目の年に第一回の受賞に浴し感銘しています。  
 花柳 昨年、私の会のリサイクルに支援をいただき、又、今回賞を受け、これを

土肥 私は若い頃から教員生活の傍ら読書の道を歩んできました。福井県には、その道の先人が沢山おられ、小浜では山川豊美子、福井の越前屋、古くは珠真野の万葉の歌

財団では、2月7日（ふるさとの日）日本原電敦賀事務所で第一回げんでんふるさと文化賞・芸術新人賞の表彰式を行いました。（受賞のみなさんを4頁に紹介）  
 この機会に受賞されたみなさんと田尻財団理事長を交えた座談会を開催し、「福井の文化」について語ってもらいました。

動みに子弟の指導や自らの勉強に努めたかと思えます。

高木 第一回目の受賞で光栄です。これを契機に後進への指導と自身の励みとして頑張りたいと思います。

司会 福井県は素晴らしい自然や歴史、文化に恵まれ、このような資源や由來が県民文化の風土づくりの原点だと思えますが、皆様の活動を通じて日頃感じておられることをお聞かせください。

## CONTENTS

- ・「福井の文化」を語る座談会 P.2,3
- ・敦賀市立博物館訪問 P.4,5
- ・第2回ふるさと大賞 写真コンテスト入賞作品展 P.6,7,8
- ・特集 福井と恐竜（その2） P.9
- ・国指定重要無形民俗文化財 敦賀西町の綱引き P.10
- ・人間国宝「狂言鑑賞会」 P.11
- ・平成12年度財団事業計画と予算のあらまし P.12
- ・第10回高校総合文化祭 ファイル P.13
- ・情報ファイル P.14,15
- ・財団ふれあい通信 P.16

### 表紙の説明

国指定重要無形民俗文化財

## 日向の水中綱引き

(美浜町 日向)



この民俗行事は江戸時代初期（1630年頃）から行われてきたといわれています。伝説によると、その昔、日向湖と若狭湾をつなぐ運河に大蛇が出て村人達は大変困っていました。「蛇は自分より大きいものを恐れる性質がある」というので村人は藁で大綱を造り、運河に常時張ったところ大蛇はその後出なくなったといわれ、その縁起の良い綱に少しでも触れようと海中で引き合ったのが始まりと語りつがれています。

1月15日、太さ30釐、長さ40米の綱が運河に渡され、午前中、宇波西神社で「初綱引き」の神事が行われ、海上安全と豊漁を祈願。午後2時半頃、稲荷神社に「綱引き」の赤い旗を納めると、日向のたいこ橋の欄干から飛び込んだ20余名の若者らが綱の東西に分かれ、全力で揉みあったり、引っぱったり、より早く綱を切ろうと競い合います。こうすること10数分で大きな歓声とともに綱が切れ、海に奉じ行事は終了します。



花柳 楠千里氏

古来の美を継承して  
新しい文化を

人を歴史的文化的の風土に生まれています。文化とは古いものを大切にしながら新しい

ものを創りあげることが大切です。特に福井県はまとまりやすい県土・県域にあると思えます。  
 田中 文化のふれあいは、偶然かもしりませんが「出会い」から始まります。私の茶道も福井師範学校時代の先生の

花柳 日本舞踊の道に入ったきっかけは、母が踊りの師匠でありましたことと母の着物姿の美しさに引かれたことにあると思えます。美しいものを観ることが心をやわらげ、美の追求に連なるものです。古来の美を継承して新しいものを創る、これが文化ではないでしょうか。  
 高木 私は、小さい頃より踊ることが好きで、家の近くに稽古場があつてよく見に行きました。  
 バレエは、まず踊りの基礎を習得することが基本です。そしてその積み重ねていく努力によって技能を高めていくものと思えます。また、バレエは洋装とはいえ、日本舞踊の伝統的な良さも取り入れ、新しいものの創作と表現する研究努力が大切だと思えます。  
 理事長 日本古来から伝承されている文化遺産を大切に新しい文化を創造していくことが現代文化の活性化に連る。

第1回  
げんてん

## ふるさと文化賞 芸術新人賞

# 受賞者座談会



田嶋 三男氏  
県民文化祭を契機に  
ふるさと文化の創造

皆様のお考えはまさにその通りだと思えます。財団では、設立以来、伝統芸能等の保存、継承活動の支援や古典芸能「狂言」の公演の中に、若い層を対象とした体験学習の場を取り入れていきます。  
**司会** 県内の文化施設や文化、芸術に触れる機会など文化環境について日頃感じてもらえることをお聞かせ下さい。  
**土肥** 私の住んでいる三國は、高見順の生家や三好達治文学碑、俳人愛子句碑、

歌人林光雄・みち子碑、建物では、電翔館や文化未来館など文学・文化の街として思われています。文庫子の句の町として、内外に「みくに」を発信する運動も盛んです。  
**田嶋** 私の坂井町は開業の町ですから郷土の身近な生活文化を育てていくことに力を入れていきたいと思っています。例えばちぎれ絵など展示できる施設の充実などを町とも話合っています。

私は、昭和39年から45年まで6年間、県教委社会教育課に籍を置き、県文化協議会の事務局長を務めました。当時は文化予算も少く色々と苦労しましたが、福井県で最初の日本美術院の院展を開催したり、「岡倉天心とその周辺」美術展を開くなど、美術館の学芸員の役割をも果たしたことがなつかしい思い出として残ります。  
**花柳** 音楽部門では、県立音楽堂ができて、その施設はすばらしいものですが、日本舞踊は花道から始まりますので、この設備が必要となります。私達の公演では、

福井市の文化会館の利用が多いわけです。また、楽屋の完備も必要です。文化施設は建設当時から多目的に使える施設にして欲しいと思います。  
**高木** バレエでも、舞台、床、照明施設、楽屋など条件に合った設備、施設が望ましいわけですが、新しい施設を造る場合、これらの配慮が欲しいものです。私達の会では児童、生徒が参加しますので、これらの設備の良否が気にかかります。  
**司会** 今年は西暦で2020年、21世紀もすくやってきます。新しい世紀の地方文化を創造していくために何かアドバースがあれば、  
**土肥** 福井県の恵まれた文化遺産や伝統に甘えるのも結構ですが、やはり新しい時代の新しい文化

に連がる文化活動の展開が必要です。4月から高齢者介護制度が発足するように、文化にも相互扶助の気持ちでふれ合う制度が必要で、地元活動からさらに広げた地域活動へと県民文化の風土の輪を拡大していくことが大切。財団のご協力も期待しています。



高木 美祐貴氏  
私の夢、ふくい  
グランドバレエを創作

私も経験から見て、芸術、文化を親しむ機会の充実と文化活動への参加気運を高める環境づくりが大切です。文化・芸術には様々なジャンルがありますが、県民が親しみ、理解を深めることのできる機会の提供を財団にも大いに計画してほしいと思います。  
**司会** 平成15年には全国高等学校総合文化祭が、17年には国民文化祭が福井県で開催されます。福井の21世紀の初頭、地方文化創造の道程が始まりますが、今後の抱負などについて伺います。  
**土肥** 確かに、新しい地方文化への道が今年から拓かれなくてはなりません。県文協から市町村文協へ、さらに地元各分野にレベルを高める交流と連携を一層



理事長 田尻 義昭  
ふくい県民文化祭支援  
を制度化したい

深め、その環境整備を図り、民間、行政一丸となって取り組みたいと思っています。  
**田嶋** 県文協としても新しい装いで始まるふくい県民文化祭に向け各団体との連携を密にして、創作活動の促進を図り、新しい県民文化の創造の契機にしていきたいと思っています。  
**花柳** 日本舞踊では、師弟関係が1対1ですので、後進の子弟を増やす努力とあわせて踊りの魅力と親しまれる音としてその育成に力を注ぎたいと思っています。  
**高木** 私の夢としては、福井グランドバレエの上演を是非実現したいと思っています。すでにロシアやアメリカなどのジョイント公演など国際文化交流も計画しておりますのでフクイバレエの実力を育てあげていきたい。又、バレエは男性、女性の団員が必要ですので愛好者を増やす努力もしていきたいと思っています。

**理事** 財団では、12年度は21世紀への地方文化の創造と特色あるイメージを高めるふれあい活動を基本方針としたいと考えております。ふくい県民文化祭につきましても、微力ではありますが分野別フェスティバルの参加育成支援を制度化しましてお役に立てればと考えております。  
**司会** 色々熱心な話を拝聴でき、ありがとうございました。

高木氏は都合で表彰式に代理出席され座談会に参加できませんでした。  
司会は当財団事務理事 山田明が担当しました。

# 立博物館訪問

「みなと敦賀」の歴史的建造物として同市の指定文化財「旧大和田銀行」を本館とした敦賀市立博物館を尋ねてみました。

郷土の歴史や民俗資料の展示をはじめ敦賀にゆかりのある作家の近世絵画を中心に収集された館蔵逸品などをじっくり鑑賞することができ、伝統を踏まえた文化、美術への愛着を深めることができました。

この機会に同館の概要や取り組みなどを紹介することにしました。

## 博物館の沿革

本館は敦賀市の近代化と発展に大きく貢献された2代目大和田荘七翁が当時35万円の巨費を投じて大正14年に着工、昭和2年（1927）に竣工した旧大和田



敦賀市指定文化財の本館

銀行本店の建物で、鉄骨煉瓦造り地上3階地下1階。建物のいたるところに大理石を使用し、当時北陸では初めてエレベーターを設置するなど豪華な洋風建造物でした。戦後、大和田銀行は国策により三和銀行に合併、その後福井銀行に引き継がれた経緯がありました。同市ではこの歴史的建造物を保存しようと譲り受け昭和53年8月敦賀市立歴史民俗資料館として開館。本館の原形を崩すことなく数度にわたり内部改築などを行い、平成5年2月博物館法に基づき施設として登録し、同年7月敦賀市立博物館に名称を変更、今日に至っています。

## 交通案内

所在地 敦賀市相生町7-1-8  
 市内バス利用 「旧敦賀駅前」→「相模町」  
 （徒歩2丁白）下車、徒歩3分  
 コミュニティバス利用 「はぎの里」利用、山本会館下車  
 徒歩1分  
 白家田車利用 北陸自動車道敦賀インター  
 から約7分

## 主な館蔵品

美術・工芸資料（1・2階）  
 歴史資料（3階）



美術・工芸展示室

当館では資料館時代より敦賀ゆかりの美術品や資料を中心に、特に近世絵画の収集に力を入れており、江戸時代の郷土画家橋本長兵衛や幕末から大正にか

第1回  
 (11月) 節  
 びんとん

## ふるさと文化賞 芸術新人賞に5氏

### ふるさと文化賞

歌人として  
 文協活動に貢献



土肥英二郎氏  
 (歌人、三協文協会長)

昭和13年より教員、同54年坂井中学校長で退任。教員時代から歌人として「百日紅」の創刊に参画。優れた作品を発表。県内の多くの短歌会を育成指導。また地域文化運動に尽力し、現在三協町文協会長。短歌を通じて地域文化の向上に貢献。  
 三協町つじヶ丘町 81歳

陶芸、茶道文化の  
 発展に尽力



西村新氏  
 (兼陶芸協会長)

昭和42年県窯業試験場長、同46年初代県陶芸館長、越前焼の振興・育成に寄与。越前陶芸村づくりに参画。永年にわたり陶芸、茶道文化の育成指導に尽力。また平成元年より10年間清水町文協会長を務めふるさと文化の振興に大きく貢献。  
 清水町吾谷 78歳

文協、教養文化の  
 発展に寄与



田嶋三男氏  
 (兼文協事務局長)

昭和22年より教員、62年金津小学校長で退任。茶道の指導者としても活躍。36年県教養勤務、5年間県文協事務局長として院展の開催など画期的な役割を果たす。地元坂井町文協の創立に尽力。現在、県文協事務局長。永年にわたり茶道、文化運動に貢献。  
 坂井町大味 73歳

### 芸術新人賞

日舞の演技指導に期待



花柳千重子さん  
 (日本舞踊家)

本名・中谷千重、福井商業高校卒。小学生時代から花柳里之輔師匠に入門。昭和57年より児童、愛好者に日本舞踊を指導。自ら同5年「清風」同8年長唄「まかしよ」などを上演。快活で優れた演技、指導力に今後大いに期待される。  
 福井市安原町 43歳

浮巻の育成に  
 リーダー的存在



高木英樹さん  
 (フクイバレエ研究所長)

丸岡高校卒、昭和50年、フクイバレエ研究所入門。幼少よりバレエを習得。60年同校教師、平成6年創作バレエ「九十九の虹」でお市役を演じる。同7年同校研究所長。子弟の全国コンクール上位入賞に導く。洋舞の育成、発展に期待される。  
 金津町香宮2丁目 42歳

## 敦賀ゆかりの作家中心に 近世絵画逸品を収集

当館では毎年近世美術史上著名な作家の絵画等を系統的に整えることに力を入れており、すでに多くの館蔵逸品が収集されています。

今回、江戸末期から明治半ばに活躍した敦賀市ゆかりの日本画家幸野樫嶺（父・敦賀出身）の作品2点を紹介しました。

本誌では次号以降、同館所蔵の逸品を順次紹介していく予定です。



溪頭棲鷲図

「溪頭棲鷲図」は、榎本最晩年（1893年頃）の大作で、ワシが断崖の絶壁をめぐり、深淵をまたくように突き出た枯れ木にとまった雄姿を描いた典型的な画面。四糸派の特技である「つけ立て」という画法で、大鷲の柔軟な羽毛の重なりと質感を写事に表現しています。西洋的なリアリズムの影響を感じさせます。



雪中清水寺図

「雪中清水寺図」は、京都の名刹、清水寺本堂を舞台から見た情景の景観です。技法は、白い胡粉の使用を極力おさえ、白紙に墨の地味をとることによって、静寂を表現し、前後に並び立つ複雑な木を的確に描出して奥行きを深め、さらに無人の舞臺に仄かな朱色をさして温かみを添えるなど、静寂な無人の舞臺（堂のたてもの）を写事に浮上させています。

## ふるさとの歴史 敦賀市 文化を尋ねて



武田耕雲沓画像 須木真正筆

けて活躍した内海吉堂などの作品をはじめ、豊我派・狩野派、円山・四糸派・土佐派など日本絵画を系統的に収集方針をたて、幅広く所蔵しています。その他、版画や書、工芸品など収蔵品は多岐にわたっています。

また、定期的に新収蔵品の特別展も企画。昨年は11月3日からの1ヶ月間、

### 歴史・民俗資料 (2・3階)

敦賀ゆかりの日本画家幸野樫嶺の企画展を開催し、美術ファンの人気を博しています。

元治2年（1865）武田耕雲沓等水戸天狗党353名が松原の刑場で斬首されましたが、明治8年（1875）烈士を祀る松原神社が創建されると、遺品や古記録が他方面から多数寄進され、これらの所蔵品や多くの天狗党資料を保管展示しています。

その他、立石灯台のレンズや港関係資料、敦賀空襲、敦賀連修資料など戦前・戦後の貴重な資料が多数所蔵されています。

民俗資料では、織田信長が越前朝倉攻めの時、本陣寺前の棧敷で見物したと伝えられる古い伝統がある敦賀祭りの山車に飾る熊面、甲冑、馬具など実物を用い、衣裳、垂れ幕類が展示され、その他、郷土の生活用具類などの民俗資料が集められています。

### 考古資料 (3階)

敦賀市内には弥生時代以降、各時代の遺跡が多数存在しており、現在までに多くの遺



民俗・考古資料展示室



衣掛山3号墳出土製塩土器



衣掛山古墳群出土土環

跡が調査され、貴重な遺物が出ています。旧石器時代のナイフ形石器（約1万年半前）をはじめとして、榑川遺跡（3世紀後半～6世紀後半）、小谷ヶ洞古墳群（4世紀）穴地蔵3号墳（6世紀後半）、衣掛山古墳群（6世紀後半～7世紀前半）、黒河、2号墳、西浦古墳群（同紀）中遺跡（9～10世紀）深山寺経塚群（12～13世紀）などから出土した土器や石帯、装飾品等の遺物が展示されています。

# 写真コンテスト PHOTO CONTEST

入賞作品展

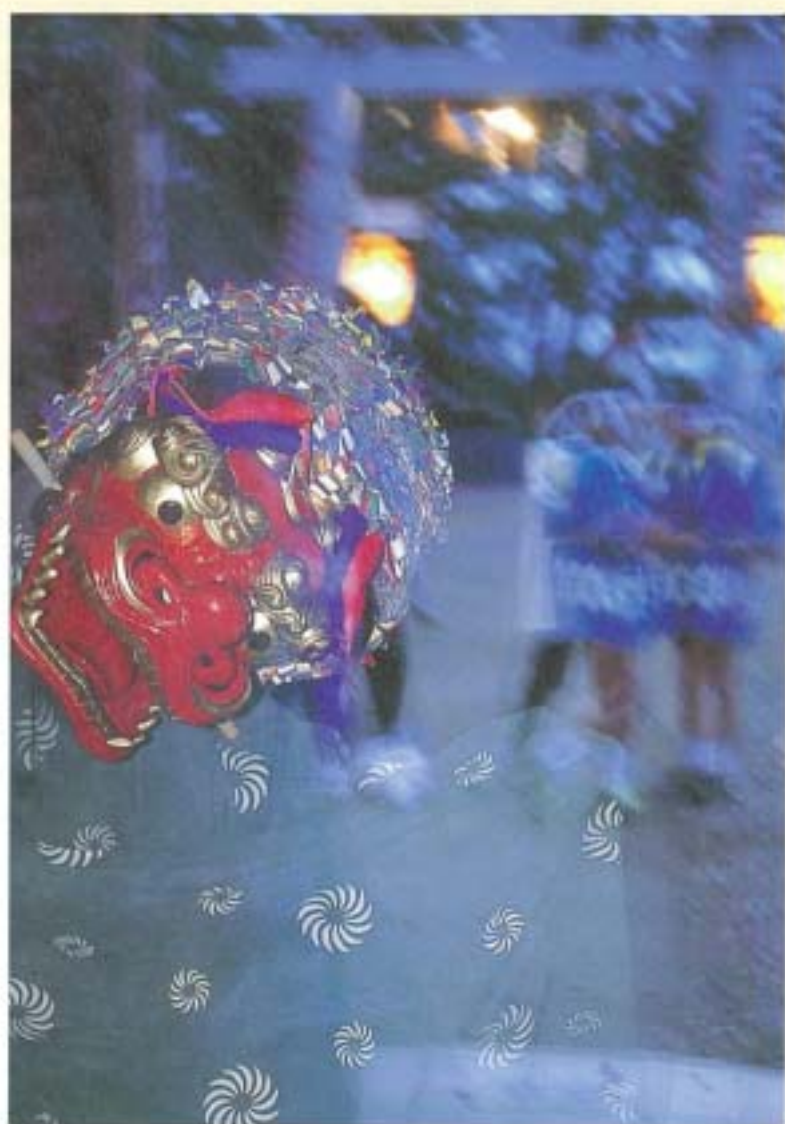
## テーマ 「ふるさとまつり」



大賞

「こしの大漁秋祭り」

松本 壽雄氏(福井市)



「獅子舞の顔」「子供の遊び」「鳥居」の3者が見事に写しだされ、また強烈な写真に仕上がっています。色調の取り合せも良く、獅子舞の赤、薄暮の神社のブルーがうまくマッチしていて好感がもてます。

カメラ技術も良く、多重露光・ストロボと自分のカメラを自由に使いこなされていて、ふるさと大賞にふさわしい作品です。

(講評/審査委員長 八木隆)

附団では、平成10年度より福井県の文化の振興とふるさと意識を高めようと郷土の自然、歴史、文化等の地域資源を題材にした「ふるさと大賞」写真コンテスト顕彰事業を実施しています。

第2回目となる11年度は、「ふるさとまつり」をテーマに作品を募集。郷土の歴史、文化を伝える民俗行事や町や村おこしのまつりなど多岐にわたる「まつり」の作品392点が寄せられました。審査の結果、大賞1点、ふるさと賞2点、優秀賞4点、入選25点、佳作26点の入賞作品が選ばれました。

2月7日(福井県ふるさとの日)日本原簿数習事務所が入賞者の表彰式を行いました。

INTERVIEW



大賞受賞の  
松本 壽雄氏

この度は「ふるさと大賞」に選ばれて、夢のように驚きと感激の気持ちで一杯です。

福井は伝統的なものから現代的なものまでバラエティに富むいろいろな「まつり」が一年を通してどこかで行われています。人々が集う「まつり」の雰囲気が好きで暗ければ、カメラ片手に出かけておりました。

受賞作は越前村の江戸時代から伝承されている秋祭りに出かけた際に独特な笛の音に合わせて若者が演じる獅子が優雅に舞っており、夢中になって撮影したものの一枚です。若者達は夜遅くまで村内を廻って舞を披露していました。

今回の受賞を励みに、更に新たな気持ちでよき出会いを求めて村や街を撮り歩いてみようと思っております。

## 総評

「ふるさとのまつり」という今回のテーマは簡単なようで難しく、応募される方は写真をどう撮り、いかに表現するか迷われた方もあったと思います。

この審査には、県内の神社等での伝統芸能や民俗行事という暮らしの中の文化、市町村の地域おこしのまつりなど、写真を通してテーマの主旨が表現されていることを重視しました。

今回の審査で感じたことは、一枚一枚見ていきますと全作品が素晴らしい作品ですが一同に並べ比べると、おとなしい写真、美しいが平凡な写真、アップすぎる写真、画面が複雑な写真が次第に選考から姿を消していきます。1次、2次と審査を重ねることにインパクトのある力強い写真が選ばれてきます。審査員が9名にもなりますと、ちょっとした欠点でも議論の対象となります。最終審査まで残る作品は、主題やテーマの狙い方、表現力が豊かで、画面構成も的確に処理され、色調のバランスも良く、なによりもカメラ機材の使いこなしが上手いように思えます。

本来、写真を撮るということは、作品の意図、主題、モチーフ（テーマ）が一番重要です。作品の良否は、作者の美意識や自然観・人生観などによって決まるものですが日頃から鋭い感性を養い、被写体を見る目を養うことが必要です。

審査委員長 八木 隆

## 入賞作品展示会

敦賀・福井2会場で開催

入賞作品（58点）の展示会を2月1日から13日まで敦賀市「げんでんふれあいギャラリー」で、同月18日から23日まで福井市のショッピングシティ「ベル」で開催。会場に訪れた大勢の人たちは、入賞の力作に見入っていました。



カメラアングル（特に高さ）がピッタリで、広角レンズの特性を生かして奥行きを写し出しています。全体への目配りもちゃんとされており、踊る影でまつりを上手に表現しています。

光線の取り入れ方もうまく、少々沈んだ色調を再現して味があります。ただ、画面下部の白線と空気が気になります。その分、上部を出して左右の風景で中央の谷間を強調するともっと面白かったでしょう。

（講評/審査員 谷口恒夫）



## 女性の部

「影も踊るよ  
ビービィハーララ」  
熊谷和子さん（福井市）

## 一般の部

「水無月まつり」  
吉本 興一氏（敦賀市）

海の中のおみこしを明快に切り取って空の色、構図、シャッターチャンスも良く、楽しい雰囲気を感じられ、作者の目の確かさがよく示されている秀作です。欲をいえば「動き」があればさらに良かった気もします。

（講評/審査員 水谷内健次）



## 審査員のみなさん

■審査委員長 八木隆（写真家）

■審査委員

苅田義和（福井テレビ、映像部長）

奥村広文（福井フジカラー（株）専務取締役）

谷口恒夫（福井新聞社、写真部長）

野田剛生（県立美術館、学芸員）

水谷内健次（福井県文化協議会副会長）

横山勝昭（福井放送、映像デザイン部長）

田尻義昭（当時副理事長）

内山昌幸（日本原電（株）取締役教習事務所長）

一般の部



「里のまつり」 佐々木 英樹 氏(蘭江市)

里の春まつりの雰囲気を通して真に其事に表現して、のどかな春の情景の中にまつりに集う人々の声が開いて来るようです。まつりの行列を広角にとらえ、前から最後尾までをシャープに写しだすと共に田の中に写る人々の影が一段と深みを表わしています。

(講評/審査員 奥村広文)



「玉すだれ」 梅津 武博 氏(美浜町)

静止画でありながら玉すだれの連続の動きと掛け声が聞こえ、周りの見物人までが見えてきそうで、笑顔のシャッターチャンスがうまく生きています。

ただ、顔にかかった頭巾と雨どいが気にかかります。

(講評/審査員 笈田義和)



「あさひまつり」 小林 有美恵 さん(丸岡町)

「あんどん」の明かりを流し、人物をストロボで止める写し方はよくできています。山車を回す男たちの躍動感があふれる姿が感じられます。ただ「まつり」とすれば周りの人物の楽しさもうかがえると更によい作品になると思います。

(講評/審査員 横山勝昭)

女性の部

横に流れるのぼりと縦にのびる海橋が作り出した一瞬の瞬間の妙を見事にとらえています。のぼりの中は風が吹き抜け、橋上を歩く子供たちの動き、辛抱強くシャッターチャンスを持った力作です。

海中から現れた巨魚の大群が、一斉に橋を飛び越える光景にも見えてくる。見る者の心にもさわやかな春の風を吹き込むすがすがしい一枚です。(講評/審査員 野田潤生)



「風に泳ぐ」 橋本 洋子 さん(福井市)



▲三好渚治文学碑  
で説明するガイド活動

寺岡会長さんは「私たちの奉仕活動は、会員の和を大切に、三国を愛し、ふるさと文化を広く伝え、町づくりに寄与できるように努めます」と語っていました。

「遠く懐かしいものの匂う町、三国を歩きませんか」を合言葉に、ボランティア観光ガイド活動をしている「きたたまえ三国」会長・寺岡賢一郎氏を紹介します。

同会は、平成3年11月、町内の有志が発起人となりボランティア観光ガイドグループを設立し現在38名の会員で同町の観光案内等を中心に奉仕活動を行っています。

三国町は江戸時代末期船の港として栄え、当時の建造物、由緒ある神社、寺院、東舞坊、ゆかりのある文学の町として多くの文化遺産に恵まれ、これらを後世に伝え、広く内外に発信していく役割を担っています。

そのため毎月1回、歴史家などを招き、学習会を開催。すでに設立以来11年未だに250回の出発を数え、利用者も5500人を超える実績をあげています。また、形跡遊歩道などの清掃奉仕や海浜自然公園まつりなどにも協賛し、地域環境や町づくりにも力を入れています。

ボランティア観光ガイド  
グループ「きたたまえ三国」

ガンはつています  
ボランティア



特集

# 福井と恐竜 (その2)

## 小型肉食恐竜から鳥類へと進化か… 県内から鳥類足跡化石も多数発見

今

から1億年以上前、福井県地方に恐竜がすんでいた頃、当時の自然環境は今とはずいぶん違っていたようです。福井県のあった場所も今の場所とは違って、現在の日本海の真ん中あたりに位置し、大陸の東端であったと考えられています。自然環境も今と異なり、かなり大陸的な様相を呈していたと思います。

福井県に恐竜がすんでいたのは、今からおよそ1億2千万年前と考えられています。この時代は、地質学的に「白亜紀前期」と呼ばれている時代です。この頃には大陸でも多くの恐竜たちが生活していました。近年の発掘調査でアジア大陸における白亜紀前期の意義深い恐竜化石が発見されています。それは、小型の肉食恐竜で、鳥類の起源をたどる上で大変重要なものです。

鳥

類の祖先というところに始相鳥を思い浮かべます。始相鳥は、1860年に羽が見つかり、つづいて1861年に最初の骨格が発見されま



福井県和泉村産の白亜紀前期鳥類足跡化石



中国遼寧省北票の中棘竜属等の産地

また、今年になって、モンゴル国から尻尾に羽毛があったオビラフトルという肉食恐竜も論文として発表されました。

こ

れら一連の化石の発見から、小型肉食恐竜から鳥類へと進化した過程がかなり詳しく分かるようになってきました。つまり、ジュラ紀後期から白亜紀前期にかけて気候のやや寒冷化するのに伴って、小型肉食恐竜(中華竜、始相鳥や尾羽鳥など)が、羽毛を獲得し、それが次第に飛行能力を有する動物(始相鳥)の出現を促し、翼から歯を失い、前足がカギツメや指のない翼をもち、尻尾が短くなった鳥類となっていくと考えられるようになります。そうだとすると、恐竜は絶滅したのではなく、現在も鳥に姿を変えて生き続けているということになります。大変興味深いことだと思います。

福

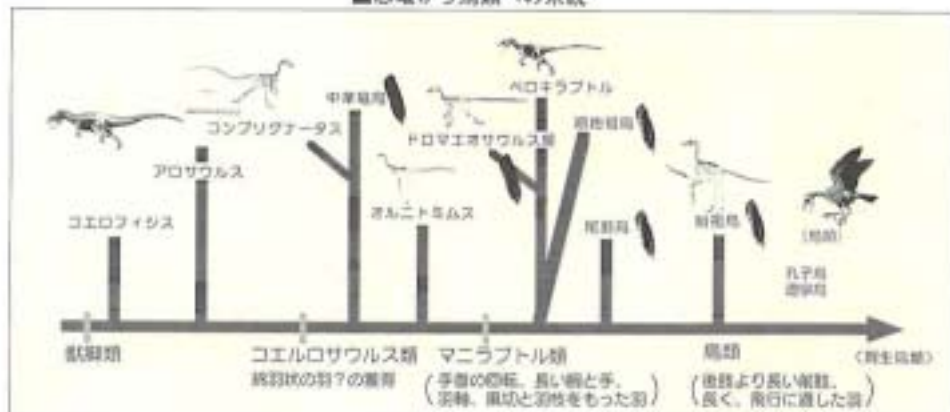
井県からも中国遼寧省と同じ時代の鳥類の足跡化石が多数発見されています。また、小型肉食恐竜の化石も発見されています。今後の発掘調査の進展次第では、福井県からも羽毛を持った恐竜や、鳥類の化石が発見される可能性が十分あります。今年夏開館の「福井県恐竜博物館(仮称)」では、このような恐竜と鳥類の関係を詳しく説明した展示も計画されています。

しかし、1995年中国遼寧省の白亜紀層から、羽毛のある小型肉食恐竜が発見され、鳥類との関連で大きな議論が巻き起こりました。さらに、遼寧省一帯から、飛行能力のある鳥の化石(孔子鳥、遼寧鳥など)や新たな羽毛をもった恐竜(原始相鳥、尾羽鳥、ドロマエオサウルス類)が相次いで発見されました。



中華竜鳥  
中国科学院  
董教授提供

■恐竜から鳥類への系統



国指定重要無形民俗文化財

# 敦賀西町の綱引き

古くから港町として栄えてきた敦賀市の旧幸区西町（現在の相生町）で毎年1月15日の小正月に国指定の重要無形民俗文化財「夷子大黒の綱引き」が同保存会の手で盛大に行われます。

## 夷子・大黒に分れ引合っ

—豊漁・豊作の願いを託して—

2000  
1.15

この綱引きは約400年以上前から伝承されてきたもので、東は夷子、西は大黒に分かれ約50メートルの大綱を引合い、夷子側に軍配が上ればその年は豊漁、逆に大黒側ならば豊作といわれ、西町の人々が一年の始まりをこの綱引きによってその年を占

う伝統の民俗行事です。今年も大勢の出入で賑いました。

この西町は戦前魚市場があり、魚・海産物問屋、蒲鉾屋、味噌・醤油屋、米屋等の商いで賑う商人の町でした。

当日の午前中、町内の道路北側に東西に足場丸太で櫓を組み（昔は小黒根にのせた）これに引き綱を軒高に吊り渡し、大綱に縄や紐でつづいた「やくもの」と呼ばれる鯛、海老、鯖、打出の小槌、土蔵の鏡、米俵などの飾り物を吊り下げられます。

正午よりお宿（役員宅）で神事が行われ直会の後、年男二人が古式豊かな独特の衣裳を付け、夷子の面、大黒の面をつけ、夷子神は右手に竿に取り付けた張子の鯛を、大黒神は左手に「打出の小槌」左手に「金枝」を持ち、「夷子勝った」「大黒勝った」「エイヤ、エイヤ」と叫びながら町内を一巡ります。「左巻長倒し」を行い、両神が中央に来たところで合図の太鼓が鳴り、吊り下げた大綱が路上に降ろされ、待ち構えていた人々が二手に分れて、「エーヤサ」「エーヤサ」の掛け声轟しく、福の神を我が方に引き寄せようと競います。

勝負は一回限り、夷子方が勝てば豊漁、



両神が「お立台」に上がった後、太鼓を合図に綱引きが始まる。



町内を練り歩く夷子大黒両神

大黒側が勝てば豊作になるという神恩を占う微笑ましい行事です。

### 両神古雅な衣裳

両神の衣裳は、敦賀志（氣比神宮の社家石塚寛元（1778-1850）の著）によると「唐摺緞美錦茶色の唐獅子に鳳凰の縷、何れも美々敷く、また古雅なり」とあり、特異な衣裳で価値の高いものです。この衣裳が作られた年々は別然としませんが、大黒神用の「打出の小槌」の柄には延宝7年（1679）と記されており、この行事が発祥したころのものではないかと推測されます。また専門家の見立てによると大黒衣裳は能衣裳、夷子衣裳は狂言衣裳といわれています。

### お面も古いわれ

両神の面は、本面と仮面とが引継がれていて本面には両神とも慶長2年（1597）の作と記されています。仮面は明治の頃複製され、本面は保護するための複製に安置し、

毎年の綱引きには仮面が使用されています。

### 伝承の綱作り

#### 町内挙げて結束

現在の綱作りは昔から伝承してきたそのまます受け継いでいます。まず昨秋収穫された稲藁で玉作りから始まり、玉は藁のすべを除去し、藁の芯になったものを約10本位揃え、株の部分で結んだものを作ります。次に玉がある程度出来上がった時点で綱作りにも男3人1組として3組編成し、3方に別れて三つ綱に編んでいきます。3組とも出来上っている玉を10束位揃えて巻き付けた藁の中央部分に株側を差込み、別の藁で抜けないよう固く結び付け、この作業を長さ約50メートルの大綱に編んでいきます。藁の量は70〜80マル（1マルは概ね粗5〜6株を1把とし、その24把）必要とします。最近稲刈りの近代化により稲藁の確保や綱作りにも多くの苦労が秘められています。綱作りには町内の全員が参加し、早朝から1日ばかりで作り上げられます。



町内挙げての綱作り風景



# 人間国宝の狂言を鑑賞 ～茂山千作師ら敦賀公演～

財団では平成11年度事業として11月24日敦賀市のプラザ萬象能楽堂で人間国宝の茂山千作師一門を招き「狂言を楽しむ会」（日本原電協賛）を開催しました。昼夜2回の公演に約700人が集まり、日本古来の喜劇を堪能しました。



「無布施経」を演ずる人間国宝茂山千作師（右）

昼の部では敦賀市内の中学生（気比中、松陵中）約400名が体験学習の一環として参加。狂言の由来や小道具、役者の演出などの解説を聞いた後、「柿山伏」「附子」の2曲を鑑賞しました。

夜の部の出し物は「二人袴」「無布施経」「神鷹」の3曲。一流の伝統芸能を楽しむもうと市民約300人が詰めかけました。

お布施をもらえず四苦八苦する僧の物語を演じた「無布施経」では、千作師が僧侶役で登場、家主とのコメディカルなやりとりで大きな笑いが湧き起り、師の円熟した演技に大きな拍手が送られていました。

## 「狂言の世界」をどうみた ～中学生の感想～

「芸能、音楽など文化は、どの時代でも常に必要なのは感じる興と観る側の若い感性だと思う。その感性が日本の伝統芸能をより発展させ、先人が築いた宝物を大切に受け継いでいくことが原点だ」と著名な文化人が語っています。このような考え方をどのようにとらえたでしょうか。中学生と引率の先生に「狂言の世界」の感想を聞いてもらいました。

はじめはいやだと思ったが  
見てはまってしまった

松陵中2年 前田恵二君

狂言は、小学生の時に「附子」を観たことがあったので少しは分かっていただけ、その時は声だけが聞いたことがなかった。なので演技を見たのははじめてでした。思ったよりもおもしろかったのでまた見たいと思いました。独特の声と演技は僕たちにはまねのできないすばらしい声と演技でした。狂言を見に行くまでは、おもしろくないかなと思っていました。実際見たらおもしろかったです。

狂言の中でもすごいと思ったことは、一つの小道具しか使わずに演じることです。言葉で伝えることはむずかしいけれどとても内容がよく分かりました。機会があったらまた見てみたいです。



体験学習として狂言鑑賞に集った中学生

## 生の「附子」を見て 伝統文化を学んだ

気比中2年 小橋加奈さん

「狂言を楽しむ会」を見て、とてもおもしろく、勉強にもなったし、新しい発見をすることができました。私は狂言というものは、テレビでしか見たことがなく実際に生で見たことはなかったので、どんなものかよく分かりませんでした。最初はかたくなしいものと思っていました。でも実際見てみたら「柿山伏」は、山伏の声の調子やこっけいな仕草がおもしろく、ほんとうにそこに木や柿がある感じがしました。

「附子」は、小学生のとき、国語で習った。その時は、よくわからなかったけど、今日は太鼓、次郎がしゃべりがおもしろく、2人のおどろき方に自分もつられてびっくわして「附子って、こういう話なんだ」と理解できました。今まではテレビでしか見たこと

とがなかった私の狂言に対するイメージを見事に壊してくれました。そして室町時代から伝わる文化を私たちに教えてくれました。

## 動きと様式美に感動

松陵中教員 佐竹由美子先生

3年前に、やはりプラザ萬象でこの狂言を拝見させていただきました。その時は、本当に勉強不足、知識不足で日本の伝統芸能に初めてこういうものもあったのだとつくづく感心しました。

今回はあれから本を見たり、歴史についても少々は知識もふえましたので、心の余裕を感じながら鑑賞することができました。

特に言葉のかけ合い、間合いが笑いをさそっていて「狂言は喜劇だ」という説明がうなずけました。また、動きが様式美というが、洗練されていて、どこをとっても絵になるというのは口頭で並々ならぬ努力の積み重ねのたまものと感動しきりでした。日本芸能の原点といわれる「狂言」は本当に奥が深いと思いました。



「柿山伏」山伏が柿の木から飛び落ちる場面

基本方針

21世紀へ地方文化の創造  
財団の特色あるイメージづくり

平成12年度の財団事業計画と予算は、3月9日に開かれた評議会及び理事会で決められました。事業計画の作成にあたっては、21世紀への地方文化の創造と財団の特色あるイメージづくりを基本方針としました。この方針を踏まえ、県内文化団体等との連携を密にし育成的事業の支援、地域に根ざしたふれあい活動を柱に次の6重点施策を推進します。

6重点施策

- 1 県内文化団体等に対する助成事業の充実。
- 2 ふくい県民文化祭参加育成支援事業の創設。高等学校総合文化祭等の育成支援。
- 3 文化・芸術鑑賞機会の提供に魅力あるイベントを開催。
- 4 中学生の海外交流派遣事業の実施。福祉寄席の開催等ゆとり・ふれあい活動の推進。
- 5 ふるさと文化賞・芸術新人賞の選定、ふるさと大賞写真コンテスト等顕彰事業の実施。
- 6 親しまれる財団を目指した広報、広聴活動の充実。

総額9,896万円

支出の部では、重点施策に焦点をあてた予算編成を行い、事業費8270万円を計上。文化団体等の助成費は2500万円を予定しました。新規事業ではふくい県民文化祭参加育成支援、恐竜エキスポ協賛事業等に所要額を措置しました。

財団「寄付行為」で定めている事業区分では次のとおり。

- 1 地域文化の振興事業 1810万円
- 2 ふれあい・ゆとりの創造事業 1490万円
- 3 芸術鑑賞機会の提供・文化創造事業 3530万円
- 4 文化活動への顕彰事業 700万円
- 5 その他の事業（ホームページの開設・広報誌など） 740万円

収入の部



支出の部



福井県出身 新人音楽家（指揮者）

齋藤一郎氏から留学報告

オーストリア  
ウィーンより

将来有望な若手芸術家育成のための「財団特別奨励金支給制度」の初の受給者として一昨年来、オーストリアのウィーン国立音楽大学に留学中の齋藤一郎さんから2年間の留学成果を綴る報告が財団に寄せられました。



ウィーンの「カーレンベルグの森」での齋藤さん

ウィーンでの2年間

2年の留学生活を終え、何か変化したであろうか、自分に問うてみる。①音楽がより好きになった。②指揮者（音楽家）はますます大変な職業と感ずる。③モーツァルト、ベートーヴェン、マーラーといったウィーンで活躍した音楽家をより身近に感じることができた。④ドイツ語で、ややオーストリア訛りの言葉が書えるようになった。⑤食、日本酒から、肉、ワインへの食生活。

文化というものを考えるようになったのもウィーンにきたからである。文化の意味は、岩波国語辞典によれば、「人類の理想を表現していく精神の活動」。ウィーンで、あるドイツ人指揮者は僕が指揮しているのを見て、「君、才能あるけど音楽に文化が無いね」と言った。一瞬反発を感じたが、今は少し意味が理解できる。似たような言葉で、僕の先生は、「生活の為に音楽やってる輩がほとんどで、音楽のために音楽やってる奴は、ほとんどおらん」と言われた。ここでの生活の為に単に生計の為、という意



ハンガリー、セゲト市、州立フィルハーモニカでの練習風景

味合いだけではない。家族の為、自分の為、酒の為など人により聞き換えることができるだろう。それは、文化（音楽）至上主義的には、理想を実現していく精神の活動が弱まるが、または挫折していくことに他ならない。

音楽史上で現在、その作品が演奏されている作曲家は、優れた作曲者であればある程、文化の為に作曲をしている。先に述べたウィーンの作曲家は、その度合いが90%以上のとてつもないエネルギーを持っていた人間達である。偉大な作曲家たちの下僕にすぎない音楽家は、それを忠実に再現し、後世に伝えていく使命を持っている。オーストリアは大野の高校を出て、東京で10年生活しても解らなかつたことを教えてくれた国である。僕は、指揮者として日本で文化を育ませる一員としての義務があると思つた。

（齋藤 一郎）

11年度

# 第10回福井県高等学校総合文化祭ファイル 若い感性を結集した 音楽フェス・芸術祭



合唱部門



初めて披露された吟詠剣舞



吹奏楽部門



マーチング部門

## 音楽フェスティバル 県立音楽堂

11/5

音楽フェスティバル(第37回高校芸術祭)は11月5日県立音楽堂(ハイモニーホールふくい)で県内27校、約千人が参加して合唱、吹奏楽、器楽管弦楽、マーチング、日本音楽、郷土芸能、吟詠剣舞の7部門に分かれ、日頃の練習の成果を披露しました。平成15年に本県で開催された全国高校総合文化祭に向け新設された吟詠剣舞には8校から14人が参加し、愛女子高や科学技術高など5校の6人が合同で「東尋坊とあや燈」なりました。

また4曲を披露、テープで流れる楽詩をバックに優雅な舞を繰り広げました。11年度近畿高校総合文化祭(徳島市)に出場した藤島、丹生、武生高の合同オーケストラは、モーツァルト「交響曲第17番ト長調」を、藤島、高志、羽水、足羽、北陸高の45人で構成した合奏団は、黒人霊歌「ジュリコの戦い」などを歌い上げるなど幅広いジャンルで日頃の練習の成果を発揮していました。

第10回福井県高等学校総合文化祭は、「見つめよう、あらわそう、心に輝く感性を」をテーマに7月28日総合合同式(大野市文化会館)を皮切りに、演劇、音楽、芸術、将棋、かるた等17部門にわたる文化活動を発表する場が次々と設けられ、延べ2500名の生徒が参加して開催されました。

今回、「音楽フェスティバル」と「絵画・書道・写真・新聞展」にスポットをあててみました。

## 美術・書道・写真・新聞展 県立美術館

11/11~14



美術展



書道展



写真展



新聞展

高校芸術祭の一環として開かれた美術、書道、写真、新聞展は11月11日から14日までの4日間、県立美術館で県内の27校から参加若さと感性で仕上げた力作634点が展示されました。

美術部としては27校から200点以上が出品され、抽象画や具象画のほか、立体的な造形作品や彫刻が展示され、どれも個性的な作品が目立ちました。

書道部門では、27校、2000点が出品され、半切紙に書き上げた行書や草書のほか、発泡スチロールに「夢」「乾杯」などの文字を彫った作品も展示され、訪れた人の注目を集めていました。

写真部門では、14校、104点が展示、同級生がモデルを務めた白黒のスナップをはじめ題材豊かな従来の写真に加え、デジタルワールドを展開した「これからの作品」も紹介されていました。

新聞部門では13校の学校新聞を掲示し、

各部の活動内容や編集方針をアピールするコメントとともに展示。パソコンやカラー写真を利用した視覚デザイン豊かな紙面づくりがうかがえるなど今回から正式に加わった新聞展を特色つけていました。



第37回県高校芸術祭ポスター

芸術高2年 内成千晴さんの作品

## 評論家犬養智子さんを招き 文化講演会

福井・県民会館

11/14



財団では福井県連合婦人会と共催（日本原電協賛）して11月14日 福井市の県民会館で評論家作家の犬養智子さんを招き、文化講演会を開催しました。

会場には会員ら約550名が集まり、「高齢社会をどう生きるか」をテーマに、参加者は講師の説得力ある話にもメモをとる姿も目立ち熱心に聞き入っていました。

講師は「21世紀への日本の将来のために男女共生参画社会の実現を強調するとともに、老人問題は女性の問題でもある。女性は50歳になったら自分の人生を楽しむために常に笑いをもち、自立した質の高い人生を追求するなど成熟した「ワイン」のような人生を送ろう。」と提案して締めくくりました。



## 「21世紀の生活」テーマに 日仏小絵画交流展

数頁

1/9~30

財団では日本とフランスの小学生絵画交流展を日本原電と共催で1月9日から13日まで敦賀原子力館で、15日から30日まで、げんでんふれあいギャラリー（本町2丁目）で開催しました。初日は、作品を出展した敦賀市松原、中郷、黒河小学校の児童、父兄をはじめフランス大使館参事官、市教委、学校長ら約70名が出席してオープニングセレモニーを開きました。セレモニーには、仏国電力公社から記念品とメッセージが贈られたほかアトラクションとして関西を中心に活躍中のミス・サリバンさんの曲芸ショーが行われるなど日仏友好交流の楽しい一刻を過ごしました。

作品展には敦賀市の3校の児童絵画32点、フランス・ビュジエ地区とサン・タルバン地区の4小学校から53点が出展。いづれの作品も「21世紀の生活」を絵題に新世紀を担う子供達の夢の多い楽しい絵が目立ち、訪れた人の目を惹きつけていました。

## 第20回 県・市町村文協 選抜美術展

大飯町

11/20~23



県文協と大飯町文協が主催した第20回文協選抜美術展が11月20日から4日間大飯町総合運動公園体育館と格技場で開かれました。

この美術展は県内24市町村文協が毎年会場を回りで、11年度は大飯町で開催。各市町村文協から選抜された絵画、書道、写真、工芸部門の優秀作品約500点が参加、展示されました。

絵画では、自然、風景をはじめ人、静物を対象とした現代画など162点、書道では、漢詩、現代詩など128点、写真には四季の自然、風景などの作品86点、工芸部門では、刺繍、装飾工芸など多彩な作品を展示。各部門とも樹土色を生かした作品が目立ち、いづれも地域における美術活動で醸成された感性豊かな力作に訪れた人達は、じっくりと鑑賞していました。



## アイディアいっぱい122点 ふくい「街の発明家」展

11/25~30

「親と子の喜びを発明・工夫に見いだそう」をテーマにした第6回ふくい「街の発明家」展（県発明くふう研究会主催）が11月25日から30日まで福井商工会議所ビル・エルフ福井で開かれました。生活や仕事に密着した実用的な発明品などが展示され、期間中約2,300人が入場。訪れた人は手に取って、ちょっとした工夫やアイデアに感心していました。

今回は発明品部門に31点、短歌や俳句などの文芸作品部門、「お菓子」をテーマとしたネーミング部門、経済金融・流通などでアイデアを提示する社会システム部門、子供アイデア部門と多彩な角度から文化や生活、社会を見直す応募作品等が展示されました。

特に発明品部門では、穴のあいたプラスチックの板を容器の中に浮かべることで、はけのペンキの量を調節できる「ペンキ容器に用いる浮き艇」やカーブミラーの裏に断熱材を張って曇らないようにした「曇り止めカーブミラー」など、生活に密着した発明品に注目を集めていました。

## 第7回小浜「日本の第九」

小浜市文化会館

12/12

「歡喜の歌」を会場に響かせた  
小浜第九合唱団



第7回若狭小浜「日本の第九」演奏会（主催 小浜第九演奏会実行委員会）が12月12日小浜市文化会館で開かれました。市民らが日本語でベートーベンの「歡喜の歌」を年の瀬の小浜に響かせることができました。「小浜第九合唱団」は中学生から高齢者まで118人が市内中心に4部構成で結成され、当日は3ヶ月半にわたって練習を積んできた成果を披露。1部では、69人の小浜少年少女合唱団が「故郷」などをメドレーで歌い上げ、2部ではメーンの第九、大阪音楽大学管弦楽団の演奏が始まり、関西歌劇団のソリストらの独唱と地元合唱団の力強いハーモニーが会場いっぱいに響かせ、詰めかけた約千人の市民から万雷の拍手が湧き上っていました。

## 第27回県婦人合唱祭

ハーモニーホールふくい

12/5

澄んだ歌声を披露した合唱祭



県婦人合唱祭は12月5日、県立音楽堂で開かれ、県内各地区の公民館などで日頃練習を重ねている19団体、600人が澄んだ歌声を披露しました。

県婦人合唱連盟が昭和49年から開催し今年で27回目。春江町のシルフィーコールの「白い船のように」で幕開け、唱歌「夏の思い出」や童謡メドレーなどを次々と披露。白やピンクの華やかな衣装もほとんど手作り、雰囲気盛り上げに役をかっていました。最後に「川の流れるように」を全員で大合唱し歌声の祭典をしめくくりました。

## 気比史学会 上方講談

賀

12/11



敦賀市の郷土史研究グループの気比史学会は結成22周年記念特別企画として12月11日市内のプラ

ザ画像で上方講談を聞く会「忠臣蔵大全集」を同市で初めて公演しました。

出演者には関西を中心に活躍している旭堂南麟・南華・南左衛門さんの真打ち3人を招き、赤穂4十巻題材に、「横川勘平」「場部問者の働き」「唯七粗忽の使者」をそれぞれ披露。昨年NHKの大河ドラマ番組「元禄雜乱」で人気を集めている題材だけに、集まった330人の聴衆は、講師の熱の入った美声と演技に大きな拍手が送られていました。

## 野沢雅世 箏・三弦リサイタル

ハーモニーホールふくい

2/26



宮城道雄作曲「手事」を独奏する雅世さん

リサイタルは雅光穂さんと親子共演をはじめ、箏とフルートで「春の海」を演奏し、和と洋が融合した優しい音色を披露。また、箏、三弦、十七弦、尺八の4重奏曲「絹の道」「アノと夢による」「華道楽曲の音」などが演奏され、会場を包む箏、三弦の旋律に集った邦楽ファンを魅了していました。

福井市出身の華演奏家「野沢雅世 箏・三弦リサイタル」（雅光穂会主催）が2月26日、ハーモニーホール福井で開かれました。野沢さんは、幼少の頃から母親で興華曲連盟理事長の雅光穂さんの手ほどきを受け、藤島高校卒業後、東京芸術大学専攻科に進学、同大学院を修了した後は国内外の演奏会に出演するなど幅広く活動しています。

## 神津十月さんを招き ときめき講演会

武生市

3/12



美泉の園も時雨れていきますか  
二人して貰った蛇の目をお届けします  
（第2回歴史博物館講座「ソククル」  
講師 神津十月さん 岡山市の作家）

万葉の里の歴史的文化遺産をまちづくり

につなげようと「ときめき講演会」（悲恋物語実行委員会主催）が3月12日、武生市民ホールで開かれました。講演に先立ち全国から公募された短歌ソククルの受賞者表彰式、万葉ジェルソミーナの歌と演奏会が行われ、引き続き、作家神津十月さんが「時代を生きたる文字」をテーマに講演しました。

神津さんは、少女時代、鯖江に在住した祖父や作家三島由紀夫さんとの対談の思い出などを語り、「日本語は多岐多様にわたる表現のむつかしさがある。最近、自分の感受性を磨き下げる術の持たない人が多い。」「刺激や情報の多い現代を生きたるためには「適性」に流されず、昔の良さを大切に、自分の感性を育てるトレーニングが必要だ。」と集まった約400人の聴衆を引きつける巧みで流暢な弁で締めくくっていました。

## 1

### 平成12年度財団助成事業を募集

申請期限  
5月1日(月)

財団では、文化団体等の事業活動を支援するため「助成事業取扱要綱」に基づいて平成12年度の財団助成事業を受ける団体を募集しています。

応募要領、対象事業、助成金など詳しいことは財団にお問合せ下さい。

#### 助成の対象団体の要件

1. 福井県内に活動の本拠を置く団体
2. 構成員(会員)が原則として20名以上の団体
3. 平成12年4月現在で、原則として設立2年を経過している団体
4. 営利を目的とせず、明確な会計経理を実施、報告できる団体
5. 特定の政治団体、宗教団体、企業に所属していない団体

#### 応募の方法

- 財団所定の「平成12年度助成事業申請書」により「推薦団体」の推薦を受け、当財団宛提出して下さい。
- 申請書のほか、事業計画、予算書など添付していただく書類等がありますので、詳しいことは財団にお問合せ下さい。

#### 助成団体の選考と決定

- 推薦制による助成団体の選考は、理事長が定める「審査会」で審査し、その適否を決定します。
- 推薦制公募方式による助成団体の選考は当財団の理事、評議員の中から委嘱された「選考委員会」に諮問し、その答申に基づき助成を決定します。

## 2

### 愛読者アンケート(げんでんふれあい福井第5号)ご回答のあらまし

本誌第5号のアンケートに総数51通のご回答をいただき、ありがとうございました。

その結果を次表のとおりまとめました。今後も皆様のご感想、ご意見をうけたまわり本誌の充実に努めてまいりますので、ご協力をお願い申し上げます。



#### 第5号で良かった記事は?

	〇印を付した数
1. O・T・A・I・K・O 展 '99	18
2. フォイデザイン・コンペティション'99	14
3. 福井と恐竜(その1)	16
4. 第3回福祉寄席	5
5. 伝統芸能八坂神社の獅子舞	17
6. 敦賀と芭蕉	33
7. 情報ファイル	7
8. その他	0

#### 今後の希望記事は?

	〇印を付した数
1. 財団文化イベント記事	18
2. 県内芸術・文化活動	12
3. 歴史・民俗部門の紹介	23
4. 文学・教養部門	14
5. ボランティア活動	12
6. その他	3

#### 本誌への主なご意見など

- 県内の伝統的な無形民俗文化財や埋もれた名所旧跡の紹介をしてほしい
- 県内の歴史・文学・教養部門を取り上げてほしい
- 若い世代の文化活動の姿を積極的に紹介してはどうか
- 県産品のアイディア料理など一ロメモで
- 実施前の文化イベント等の情報も載せてほしい
- 原子力発電関連の情報公開をしてほしい。



### 財団のホームページのご利用を

財団の事業計画、助成事業、文化イベント等をインターネット上にホームページを開設していますのでご利用下さい。

アドレス ■ <http://www.GENDEN.OR.JP>